



-病院理念-

リハビリテーション医学を実践し
患者様の幸せ・満足に貢献する病院

-基本方針-

- ・高度な医療・看護・リハビリテーションの知識を高め実践します。
- ・チームアプローチに基づいた医療を提供します。
- ・早期の患者様の社会復帰を目指します。

埼玉みさと総合リハビリテーション病院

現在、回復期リハビリテーションを提供できる体制が整つておりましたが、かなりのリハビリテーションを提供できる体制が整つてまだ十分とは考えておりませんが、まだ十分とは考えておりませんが、かなりのリハビリテーションを提供できる体制が整つてまいりました。

適応の患者様の入院受付を開始いたしました。このように、早急に転換の準備をしておりますのも、スムーズな受け入れが患者様の早期回復に



第一号発刊によせて

●院長 黒木 副武

病院広報誌創刊第2号です。広報誌は季刊の発行で、当院の情報をいろいろとお届けいたします。

今年の2月より、回復期リハビリテーションは梅雨の季節となりました。時期的には患者様の入院も冬に比べると一段落で、卒中もやや減少の時期です。当院でも4月から新入職員が26名入職となり、そのうちリハビリ関係は15名です。新入職員が50名を越えております。

つながるからであります。病棟での看護師等の基準は満たし、リハビリ病棟と同様となつております。さて、当院の病院の理念は、リハビリテーションの単位も従来の回復期リハビリ病棟と同様となつております。そのため、職員レベルの向上、スタッフの増加、チーム医療を実践し、患者様の満足の行く、早期復帰を目指しております。そのため、職員レベルの向上、スタッフの増加、チーム医療を実践し、患者様の満足の行く、早期復帰を目指しております。そのため、職員レベルの向上、スタッフの増加、チーム医療を実践し、患者様の満足の行く、早期復帰を目指しております。そのため、職員レベルの向上、スタッフの増加、チーム医療を実践し、患者様の満足の行く、早期復帰を目指しております。そのため、職員レベルの向上、スタッフの増加、チーム医療を実践し、患者様の満足の行く、早期復帰を目指しております。

(1)



●「回復期」から在宅・施設へのスムースな移行のために●

-患者様・ご家族様向けに「介護保険説明会」を開催しています-

「維持期」の主たる担い手である「介護保険制度」は、2000年(平成12年)4月の導入以前から社会的関心度が高かったのは周知のとおりです。しかし、「関心度」は高くても、いざ利用という段階で、どうしてよいかわからずお困りになった方もおられたのではないかでしょうか。

また、今年は、5年に1度の介護保険法見直しの時期であり、制度全般についてより深い理解が必要に思われます。このような時勢を鑑み、社会福祉相談室では、毎月第3日曜日にご入院中の患者様やそのご家族様の方を対象にした「介護保険説明会」



を開催しております。この7月で12回目を迎え、介護保険の申請方法からサービスの内容まで、具体的に分かりやすく説明をし、毎回好評を博しています。

単に制度の説明に止まらず、患者様・ご家族様がその人らしい生活の再建をするためのきっかけの場でもあるのが、この「介護保険説明会」であると、私たちは考えます。



みさと情報発信局

信頼の医療に向けた取り組み 患者様からお預かりする「個人情報」の取り扱いについて

改ざん又は患者様の個人情報への不正なアクセスを防止することに努めます。

4. 法令の遵守と個人情報保護措置
(コンプライアンス・プログラム) の改善

当院では、個人情報の保護に関するわが国の法令、その他の規範を遵守するとともに、上記の各項目の見直しを適宜行い、個人情報保護措置の継続的な改善を図ります。

5. 問い合わせの窓口

当院の個人情報保護方針に関してのご質問や患者様の個人情報のお問い合わせは下記の窓口まで、お申し付け下さい。

総合受付：「個人情報保護相談窓口」

*1：単に個人の名前などの情報を消し去ることで匿名化するのではなく、あらゆる方法をもってしても情報全体を特定できない状態にされていること

*2：第三者とは、情報主体および受領者（事業者）以外をいい、本来の利用目的に該当しない、または情報主体によりその個人情報の利用の同意を得られていない団体又は個人を指す

平成17年4月1日
埼玉みさと総合リハビリテーション病院
院長 黒木 副武

編集後記

このたびの第2号発刊にあたり、「広報委員会」を立ち上げました。各部署が情報を持ち寄つたことで、専門的で幅広い広報誌が仕上がったものと確信いたします。

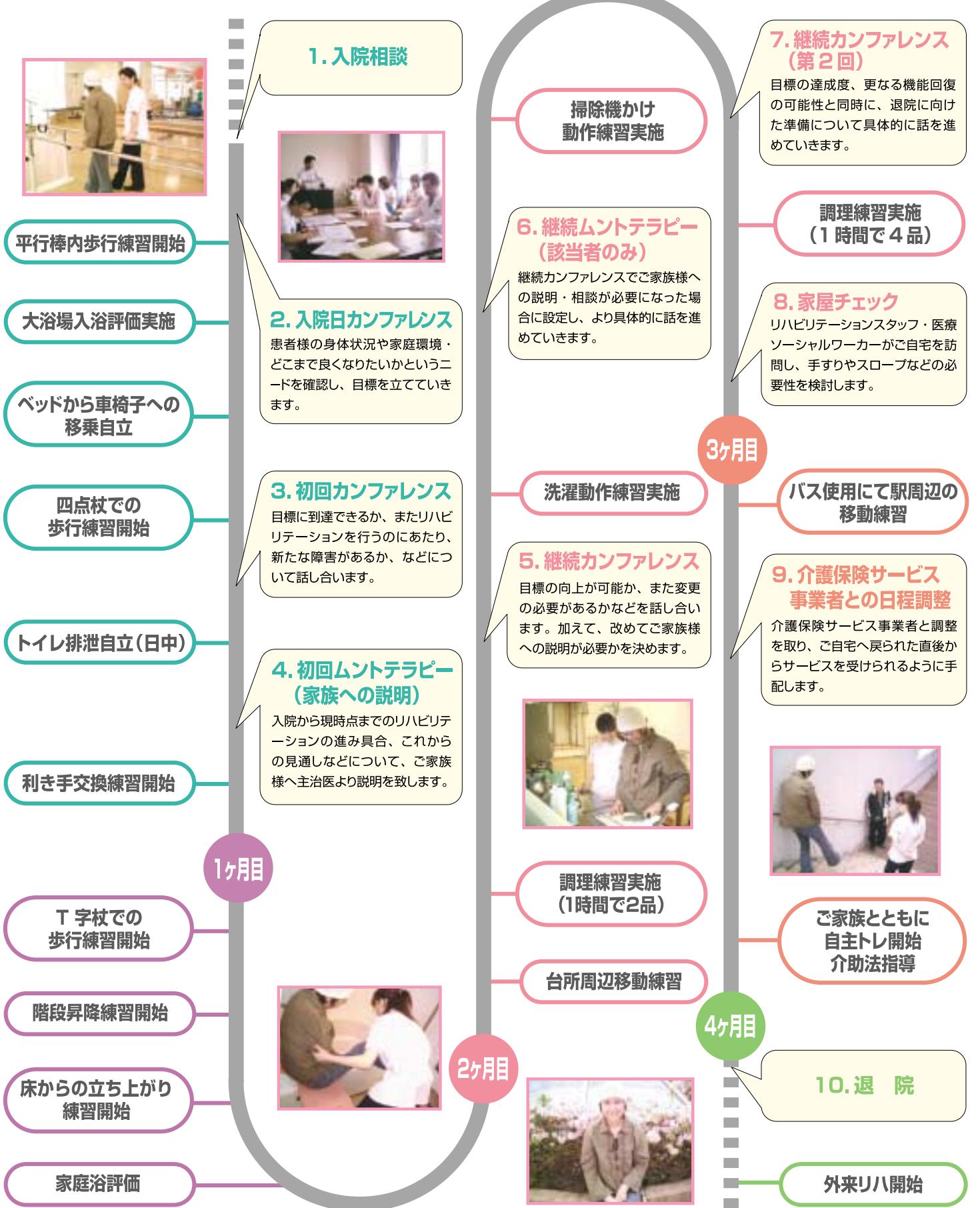
「広報」を英訳すると「パブリック・リレーションズ(PR)」になります。公共的な役割(パブリック)として、良好な関係(リレーションズ)を保つことが広報部門には求められます。皆様とのよりよい関係作りのため、当院の「今」を伝えて参ります。今後ともよろしくお願い申し上げます。

地域医療連携室 船崎 满春

埼玉みさと総合リハビリテーション病院 広報誌
Plaza.aims(プラザイムス) 夏号 2005.6
発行/埼玉みさと総合リハビリテーション病院 地域医療連携室
発行日/2005年6月
〒341-0034 埼玉県三郷市新和5-207
医療法人三愛会 埼玉みさと総合リハビリテーション病院
TEL.048-953-1211(代表) http://www.ims.gr.jp/saitama_misato/

病院概要	開院 昭和47年 平成15年12月(新設・増床)
	開設者 医療法人 三愛会 理事長 中村 哲夫
	院長 黒木 副武
	回復期リハビリテーション病棟：60床(2F) 療養(リハビリ)病棟：55床(3F)／60床(4F) 計：175床(平成17年秋に4階病棟を回復期病棟へ移行)
	診療科目 リハビリテーション科、内科、神経内科
	施設内容 回復期リハビリ病棟・療養型病床群 総合リハビリテーション施設A 言語聴覚療法(1)
	主要設備 ヘリカルCTスキャナ／X線テレビ診断(VF)装置／ 特殊浴室、リハビリ浴室
	附属施設 総合介護センター ・通所リハビリテーション ・三郷市在宅介護支援センター新和 ・埼玉みさと総合リハビリテーション病院 居宅介護支援事業所

在宅復帰への道のり -Aさんのケース-



これは、Aさんの症例をもとに、どのようなリハビリテーションが行われたかを表したものです。当院は、チームアプローチに基づいた医療を提供しています。医師、看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚療法士、医療ソーシャルワーカー等が各々の専門性を十分に發揮し、一つのチームとして患者様の「ゴール」に向けて全力で取り組んでいます。

症例紹介

氏名:A 様(年齢:39歳) 性別:女性
家族構成:夫と二人暮らし
診断名:脳出血(左視床・被殻)、高血圧、糖尿病現病歴:平成16年9月下旬の夜、食事中に手の痺れが出現。開頭血腫除去術施行される。右片麻痺と軽度失語症が残存し平成16年10月下旬、リハビリ目的にて当院転院となる。

入院時臨床像

移動は全て車椅子。左上肢使用可のため、食事や整容などの日常生活動作(ADL)は自立。また、膝折れ傾向のため、ベッドへの移乗、下衣更衣やトイレ動作などは見守りを要した。入浴時浴槽の出入は部介助。失語症は軽度で、「ミミ」ケーションには問題なかったが、不安が強く精神的フォローを要した。



リハビリ経過

● 起居移動動作へのアプローチ
継続カンファレンスでご家族様への説明・相談が必要になった場合に設定し、より具体的に話を進めています。

● 日常生活動作へのアプローチ
目標の達成度、更なる機能回復の可能性と同時に、退院に向けた準備について具体的に話を進めています。

● 3ヶ月

● 4ヶ月

● 10. 退院

● 外來リハ開始

● 退院時臨床像
右上肢機能回復のための訓練を行なつ一方で、左上肢のみでも様々な活動が出来るようになるとアクティビティー(ミシン・ネット手芸・和紙細工)を導入。退院時指導とし、夫と一緒に日中自宅で行なえる自主トレーニングを提示し又、介助を要する場合の指導を行なった。



● その他のアプローチ
右上肢機能回復のための訓練を行なつ一方で、左上肢のみでも様々な活動が出来るようになるとアクティビティー(ミシン・ネット手芸・和紙細工)を導入。退院時指導とし、夫と一緒に日中自宅で行なえる自主トレーニングを提示し又、介助を要する場合の指導を行なった。

● 現在
向かいに自主トレーニングに励む姿が多く見られた。

**※なお、個人情報保護の観点から、
①ご本人様とご家族様に了承を得、
②個人を識別あるいは特定できない状態
に情報全体を加工し、今回の症例報告
を掲載しています。**

AさんのFunctional Independence Measure (FIM) データ

